台湾国立嘉義大学

嘉義大学とは平成 18 年 10 月に本大学と研究等の協力を提携したため，学生及び教員の交流はシステム的に円滑に実施することが可能である。協定校であるため，大学における大学院生研修受け入れとして，奨学生として当大学の奨学金を受託できる可能性も高い。受け入れについての時期や期間も特に制限はない。

（1）嘉義市及び嘉義大学について

嘉義市は，台北から新幹線で 1 時間 30 分ほどのところにある人口 27 万人ほどの都市である。嘉義市の南部には北回帰線が走っている。

台湾ではそれまでの師範学院が総合大学や教育大学となったがその先駆となったのが嘉義大学である。嘉義大学は，嘉義師範学院（1957 設立）と嘉義技術学院（1919 設立）が，2000 年春に統合され，教育学部の他，農学部，理工学部など 6 つの学部からなる総合大学である。教育学部の学生が附属小学校で教育実習を行ったり，大学の研究者が附属小学校の教員と研究協力等を行ったりする点では，日本とほぼ同じシステムと言える。

台湾は TIMSS や OECD-PISA 調査の結果を見る限り，現在では日本の小・中学生より学力が高いと言える。駅前周辺にも多くの予備校や塾が目立つ台北市に比べると，小規模な都市だけに受験競争が意識されないように見える。しかし，教育熱心な保護者が当大学の附属小学校に期待するなど，教育事情は本質的には各都市部でも変わらない。

嘉義大学は嘉義市に 4 ヶ所のキャンパスがある。そのうち教育学部や附属の教員養成・研修センターは農学部や本部の立地する蘭潭キャンパスとは離れた民雄キャンパスに位置している。民雄キャンパスは市街地から約 12ｋｍ離れている。嘉義市の物価は台北市よりも安く，日常の生活に大きな不便さは少ない。民雄キャンパス付近にも学生宿舎があり，日本人のような外国人に優先権がある。大学の受け入れ協力への謝金等は特に不要であるが，必要費用等は派遣者の研究テーマ等によっても異なる。日本語教育や日本の学校教育のカリキュラム研究者もいるため，受け入れ協力体制に関しては実質的にも整っている。

（2）嘉義大学附設実験国民小学校

①学校全体の情報

大学(本部キャンパス，教育学部及び関連施設のあるキャンパス)とは少し離れたところに立地するが，大学特に教育学部とは，教育実習や授業支援，共同研究に取り組んでいる。

②現地校生徒･児童数，教員数，クラス数

・児童総数：1117 人　・教員数：102 人　・クラス数：30

③カリキュラム，学校の特色，学校周辺の様子等

他の公立小学校と比べて児童のレベルは高い。天体ドームでの観察など，保護者や地域

の人が学校に訪れ学校の施設が一部，社会教育施設の役割を果たしている。教員はこれらの活動の講師を勤めるなど，地域に奉仕し，また期待もされている。

（新校舎）

（校内にあるプラネタリウム）

④校長先生との協議：

附属小学校長は，嘉義大学教育学部教員（助教授）が兼務する。一般に台湾では「総合学習」がカリキュラム上重視され，附属小学校でも例外ではない。

児童の学習成果に関わって，学校教育についての保護者の意識も高い。PTA 活動にとどまらず，積極的に教育活動に参加する姿勢が見られる。例えば，図書館で，図書の整理や児童への貸し出しなど司書的な役割を果たす。また，上述したように，逆に教員は当学校に付設されている天体ドームや望遠鏡を用いた天体観測など，保護者や地域への貢献も行っている。「総合的な学習の時間」など，現代の教育課題についての問題意識は附属小学校教員にとって非常に高いと言える。最大の問題点は，小学校の教員に日本語を理解できる者がおらず，日本から派遣した学生の語学力であろう。

次に，上越教育大学大学院生受け入れについて，可能な事項について，聞き取り調査の結果から以下にまとめる。

現校長としては，本大学院生の受け入れを快く引き受けるとのことである。小学校近辺には，数日～一ヶ月単位で借りることができるアパートなどが存在するが，数名であれば校長宅でも引き受けてくれるとのことである。授業参観・授業実習の受け入れについても好意的であるが，当然ながら授業は全て，中国語である。

上のような状況の中で，日本語を理解することができる嘉義大学教員の付き添いのもとでは，アクション･リサーチ，フィールド･ワークを実施することは理論上可能である。しかし，当大学と附属実験小学校との連動など，課題は多い。

大学院生研修についての要望，期待することとして，当校の校長は上越教育大学及び附属小学校との交流については，非常に積極的である。特に本大学の現職教員，附属小学校教員は積極的に当小学校にも受け入れて，交流することを要望，期待していた。

大学教員相互の連携のもと，附属小学校同士の教員も交流することは，教育研究に大きな意義があると考えられる。

⑤授業参観：

・授業の概要

（授業時数）

学年	国語	算数	科学学習	総合学習	総時間数
１年	7	3	7	6	23
２年	7	3	7	6	23
３年	9	4	10	9	32
４年	9	4	10	9	32
５年	9	4	10	9	32
６年	9	4	10	9	32

・子供たちの様子

（英語の授業：集中した取組）

（コンピュータを使った授業：主体的取組）

・授業についてのコメント等

大学院生研修として参考になる事項を挙げてみる。参観可能な授業科目はほぼ全ての科目と言える。また，参観して有効な授業科目は，参観者の専門によっても異なってくるが，美術などの芸術科目や日本の「総合学習」のような教科・横断，総合的な学習の教育活動が特に意義があると思われる。また，英語教育にも力を入れているので，日本の小学校英語と比較する観点で，英語の授業を参加したり，授業実習を行ったりするのも教育研究に効果的と考えられる。

（調べ学習の結果を発表する子供たち）

（英語の授業：英語担当の教師）

（３）大学院科目「海外フィールド:スタディ」について，研修･実習に関する具体的なアイディア

現在，東アジアの教育改革の中でも，台湾の取り組みが注目されている。特に従来の教

科教育だけでなく，日本でいうところの「教科横断・総合的な学習の時間」に関連する教育活動である。年間プログラムを作成し，それらを計画的に取り組んでいるところは，日本，例えば，上越教育大学附属小学校と状況が類似している。

また，教育内容としても，知識やスキルの習得にとどまらず，体験学習を重視した取組，地域環境を教育素材とした教育実践など，日本での教育活動と同様な点が見られる。ことばが通じなくても，体験学習などは，授業観察だけでも，児童の姿勢や意識をうかがうことができる。さらに，台中教育大学附属小学校のように美術等芸術活動に力を入れていたり，体育・運動などの実技教科を重視していたりする場合，上越教育大学のこれらの専攻の院生が日本との比較を行うことなどの取り組みは可能である。

しかし，充実した「海外フィールド・スタディ」を実施したり，卒業論文や修士論文にも調査活動を活用したりする場合，やはり語学力は不可欠である。日本語だけに頼らず，中国語もしくは英語の会話力を持った学生を派遣することが理想ではあるが現実を考えた場合，困難な点が予想される。そこで，上越教育大学の学生や院生だけで，現地の学校に滞在するのでなく，この地域をフィールドとする指導教員に同行するか，上越教育大学の学生・大学院生と留学生とがペアになって，現地で共同研究を行うことも考えられる。

（４）参加学生への参考事項

東アジアに限らず，現在，各国で学校教育改革が進んでいる。国際的に見ても台湾の義務教育段階の取り組みは進んでいると言える。その点で日本に比較的近い国でありながら，これからの教育を考える点で，台湾の教育研究には意義があると言える。

台湾の小学校であっても，子ども達に接する場合，日本で教育実習を実施したり，実践授業を行ったりする場合と同様な姿勢・態度が不可欠である。また，今回訪問した２校はいずれも恵まれた家庭環境の子ども達が多いため，日本でも都市部の公立小学校で実施するというより，上越教育大学の附属小学校で実践するような意識をもって取り組むことが可能である。

ただ，最大の問題点は本稿で繰り返して述べたような「ことば」についてであろう。これは，児童に対してだけでなく，間に入ってコーディネートが期待される教員に対してでもある。大学教員や保護者の中には日本語が通じる人もいるが，そのような人達がいない場合，ほとんど日本語でのコミュニケーションは通じない。学校教員の中には，英語教員がいたりするので，その人を間に入れて英語を用いれば，コミュニケーションや状況を理解することができる。本大学の学生には，英語は，欧米圏など英語が公用語もしくはそれに近い国だけで必要なのではなく，アジアにおいても共通語であるという認識を持って日常の語学学習に取り組んでもらいたい。

台湾は治安上，比較的安全な国であると言える。しかし，交通ルールや事情は必ずしも安全であると言えない点も多いので，交通事故などのトラブルに巻き込まれることがないように注意を払うことが必要である。